

主 題：恵みシリーズ6、救い主である主2
聖書箇所：ヨハネの福音書 5章26-29節

前回私たちは、聖書が教える最も大切なメッセージ、「救い」について学びました。永遠のいのちを得ることについて学んで来ました。どうすれば私たちはこの永遠のいのち、救いを得ることができるのか？そのことを主のみことばを通して学んだわけです。この5章の24節から今日学ぶ29節までは、四つに分けることができます。

☆どうすれば「救い、永遠のいのち」を得ることができるのか？

A. 救いを得る方法 24節

- | | | | |
|------------|--------------|-------------------|-------|
| 1. 約束の救い | 1) 永遠のいのちを得る | 2) 永遠にさばかれない | 3) 新生 |
| 2. 信仰による救い | 1) 主のみことばを聞く | 2) 主イエスを遣わした方を信じる | |

B. 救い主による招き 25節

1. 神の子の来臨 : 神の子の声を聞くときが来ます。今がそのときです。
2. 死人への招き : 霊的死人、救われていない者たち、ヨハネ3:36

主は「救いを得る方法」について、どうすれば救われるのか？ということをお教えくださいました。そして、その後に、「主の招き」がありました。今も変わらず主は罪人を招いておられます。そして、今日、私たちが見ていくのは「救い主である証拠」です。確かに、イエス・キリストは罪人を赦すことができます。求める罪人に対して、その罪から完全に救い出すことができるのです。その証拠が記されています。そして、最後に「救いの必要性」について主が語っておられます。26節から見ていきましょう。

C. 救い主である証拠 26、27節

26-27節「それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。:27 また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。」

1. いのちを与える方 26節

イエス・キリストには「いのちを与える力がある」ということです。確かに、イエスは望んでいるすべての人たちに永遠のいのちを与えることができます。そのことをみことばは教えています。それはこの箇所だけでなく、もう私たちはこれまで繰り返して学んで来たことです。でも、ある人たちはこの箇所を用いてイエスの神性、つまり、イエスが神であることを否定します。なぜなら、「…子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。」ということ、すなわち「子はいのちを持っていなかったのに、あるとき父からいのちをいただいた」というようにも読み取れるからです。ですから、子なる神であるイエス・キリストがあたかも神でないかのように、彼のうちには元々いのちはなかったかのように思う人たちがいるのです。確かに、そのようにも読み取れます。

そこで、私たちはここに記されていることがどういう意味なのか？そのことを見る必要があります。もし、イエスがだれかからいのちを得た、元々持っていなかったとするなら、みことばに矛盾が出て来ます。ヨハネ1:4をご覧ください。「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。」、「この方」とは主イエス・キリストのことです。ヨハネは最初からイエス・キリストにはいのちがあったと言っています。だれかからいのちをいただいたのではなく、永遠の昔からイエスはいのちをもっておられます。そういう方だとここで明確に語られています。だから、先に言ったように、もし、イエスが父なる神からいのちをいただいたとするなら、みことばがみことばに矛盾をもたらすことになるのです。

また、5:21を見てください。「父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。」、ここでもイエスは、父がそうであるように、子である主イエス・キリストもご自分が与えたいと思う者にいのちを与えられているのです。ということは、主のうちにいのちがあるということです。ないものを人に与えることはできません。ですから、イエスにはいのちがあったと教え、また、イエスはいのちを与えることができるのであるので、26節のみことばを「あるときに父なる神によって子なる神イエス・キリストがいのちをいただいた」と取るなら、問題が出て来ます。

では、この26節は何を教えているのでしょうか？「…子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださったからです。」と、この箇所ですら特に注目しなければいけないのは、最後の「…してくださった」ということばです。これは動詞ですが、この意味はもちろん「与える」という意味があります。ですから、「与

えてくださった」と取ることができますが、同時に、「何かをするための機会や時をだれかに許可すること」、「してもいい」ということです。ですから、このことばは「与える」だけではなく「許可、認める、許す」という意味もあるのです。このことばが使われている他の箇所を見ましょう。ルカの福音書 1 章にバプテスマのヨハネの父であった祭司ザカリヤの預言が書かれています。そこにこのことばが使われているのです。1 : 73-75 「:73 われらの父アブラハムに誓われた誓いを覚えて、:74-75 われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される。」、74 節と 75 節がまとめて訳されていますが、最後の「許される。」これがそのことばです。「何かをするための機会やときをだれかに許可すること」と、ここでは「許される」と訳しています。

ですから、ヨハネ 5 : 26 に戻って、父なる神が赦されたこと、父なる神がイエス・キリストに許可されたことを教えているのです。父なる神が主イエスにいのちを与えるという働きを為すことを赦された、主イエス・キリストが人々にいのちを与えることを父なる神は許可された、そのことを記しているのです。

もう少し説明します。実は、これらはすべて「受肉」のときに起こっているのです。イエスが人となられたときにあることが起こっています。それが今話していることと関連しているのです。ピリピ 2 : 6-8 にパウロは主イエスの受肉について教えています。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。」、非常に大切なキリストの人として来られた受肉の教理が教えられているすばらしい重要な箇所です。パウロはここでイエス・キリストが神であることを否定していません。神であることを肯定し、そして、彼が人となったことを教えるのですが、人となったからと言って、彼が神であることを捨てたとは言っていない。ですから、「ご自分を無にして、」、「神のあり方を捨てられないとは考えず、」というのは「神のあり方を捨てた」ということです。

こういう箇所を見ると、ある人たちはイエスが神でなくなった、イエスは人となったときに神でなくなったと言いますが、そんなことを教えてはいません。では、何を教えているのでしょうか？その前に、先にも少し触れましたが、この箇所は、主イエス・キリストが人間となったときに神でなくなったと、そのような誤った解釈をする人たちに対して、主ご自身はどのように言っておられるのか？ヨハネ 5 章を見ましょう。5 章ではすでに見て来たように、主が繰り返してご自分が神であることを主張されています。だから、ユダヤ人たちは彼を殺そうとしたと私たちは見ました。21 節から見てください。「父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。」、主イエス・キリストと父なる神が同じだ、いのちを与えることができる神だと言っています。22 節「また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。」と、この後見る「さばき」のことが書かれています。つまり、父なる神と子なる神が同じだということを教え、その後、23 節「それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。」、父と子がいかに一つであるか、そのことを言っています。もし、あなたが父を敬っていなければ子なるイエスを敬っていないし、子なるイエスを敬っていなければ父なる神を敬っていないと言うのです。

ですから、このようにして、今、私たちが見ているみことばは、イエスがだれであるか？イエスは神であると繰り返して教えているのです。ですから、イエスが人となったと言っても神でなくなったわけではないのです。では、これから正しい解釈を見ていきましょう。先に見たピリピ 2 章で、神のあり方を捨てたとありましたが、それは「神としての属性、神としてのご性質を、父なる神のみこころから独立して用いることを制限された」ということです。主イエス・キリストは神ですから、神としての性質をもっておられます。しかし、それを父なる神から独立して用いる、そのことはしないと決められたということです。そこで、19 節を見てください。「そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何事も行うことができません。…」」、ここを見ると不思議に思いませんか？全能なる神であるイエスご自身が「自分からは何事も行うことができません」と言っているのです。5 : 30 を見てください。「わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」、イエスは神として何事も行なうことができないのでしょうか？いいえ、神であるイエスは何事も行なうことができます。でも、イエスは人としてそこに制限を設けたと言うのです。いくつかの例を見ましょう。

・ナタナエルのこと

イエスはすべてのことをご存じである全知の神であることを明らかにされている箇所は聖書の中にかくさんありますが、ヨハネの 1 章を見てください。1 : 45 からナタナエルという人物のことが書かれています。ピリポはベツサイダという町の出身でした。アンデレ、ペテロと同郷でした。そのピリポが

ナタナエルを見つけて彼にこのように言います。1：45「彼はナタナエルを見つけて言った。「私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです。」と。ピリポはモーセが預言していたその方にお会いしたと言います。そのときにナタナエルはピリポに言います。46節「ナザレから何の良いものが出るだろう。」と、続いて、「ピリポは言った。「来て、そして、見なさい。」と言って、ナタナエルをイエスのところに連れて行こうとします。1：47 イエスはナタナエルが自分のほうに来るのを見て、彼について言われた。「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い。」48 ナタナエルはイエスに言った。「どうして私をご存じなのですか。」イエスは言われた。「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たのです。」、もしかすると、ナタナエルはここで「私がそこにいるのをご覧になったのですか？どこからご覧になっていたのですか？」と言うこともできたでしょう。でも、ナタナエルの反応は違いました。49節「ナタナエルは答えた。「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と。こうして、私たちはイエスがだれであるのかということを見るのです。イエスは確かに、全知のお方です。そこにおられなくてもちゃんとご存じです。ですから、私たちはこうしてイエスご自身が神であるということを見るのです。

・嵐を静められたこと

また、全能さを示されたときがありました。よく皆さんもご存じのように、イエスが弟子たちとともにガリラヤ湖におられたときです。突風が吹いて来て波が荒くなり舟が沈みそうになったときに、弟子たちはイエスに助けを求めます。マルコ4：38－41に書かれています。「1：38 ところがイエスだけは、ともにのほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか。」1：39 イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。40 イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」41 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのでしょう。」、この方が言われると、風も波も言うことを聞くと…。このように、主イエス・キリストには何も不可能がないこと、イエスが全知全能の方であることを明らかにされたという、その出来事はたくさんあります。イエスのご自身が神であることを隠してはおられません。明らかに、そのことを示しておられます。

・「この世の終わり」に関して

弟子たちがイエスにあることを質問します。それは「この世の終わり」に関することでした。マタイ24：3「イエスがオリブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりにには、どんな前兆があるのでしょうか。」とこのように尋ねます。その後、イエスはそのことを話されますが、24：36に「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。」と言っておられます。子であるイエスは全知のお方ですから、すべてのことをご存じです。そして、そのことを証明されました。しかし、ここでは「知らない」と言われました。まさに、イエスは100%神であり100%人間でした。ご自身が神であることをいろいろな機会に示されました。また同時に、ご自身が完全な人間であることを示されたのです。ピリポ2章が教えたのはそのことです。

・悪魔の試みに対して

イエスは必要を覚えられました。空腹を覚えられたことがあります。イエスは私たちに完全な満足をお与えになるお方ですが、40日40夜の断食の後、主イエスは空腹を覚えられたとみことばは教えています。主イエスは二匹の魚と五つのパンだけで5000人の男性たちの必要を満たされた方です。その方が空腹を覚えるはずはないのです。しかし、みことばを見ると彼は「そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた」（マタイ4：2）とあります。人であったイエスは自分の空腹を満たすために神であるご性質を用いることは為さなかったのです。サタンはこう言います。「1：3 すると、試みる者が近づいて来て言った。「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」と、もちろん、主がそのことを望むならそのようにできました。しかし、そう為さなかった。4節に「イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」とある通りです。なぜなら、主イエスがこの世に人として来てくださって人として歩まれたイエスの人生はこのことばをもって表わすことができるからです。イエスの人間としての地上での歩みは100%完全に人であり、そして、父なる神に従順に従った、人であるイエスは主に対して100%完璧に従順に従われたのです。そして、父なる神のみこころであるなら、ご自分の神としての性質を示されたのです。

ですから、主イエス・キリストは100%どこから見ても神であり、これから先も神です。この方は永遠から永遠まで神です。そのことは絶対に変わりません。そして、主イエス・キリストがこの地上にお見えになったとき、彼は100%、私たちと同じように人として来られたのです。違っていたのは、この方には何も罪もなかったことです。ヘブル4：15で「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できな

い方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」と教えるように、確かに、イエスは人でした。私たちと同じ人間でした。そのことをみことばは私たちに教えるのです。

さて、ヨハネ5章に戻って、父なる神は主イエス・キリストに「いのちを彼が与えたいと望む人たちに与える」という許可を与えました。ここで私たちが見ることは、イエスが神であるという証拠は、イエスはそれを望む人たちに永遠のいのちをお与えになることができますということです。それによって、確かに、彼が神であり救い主であることを明らかにされたのです。

2. さばきを行なう権利 27節

二つ目の証拠は27節「また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです」、
*主イエスは、父なる神がそうであるように、「いのちを与えることができるお方」であり、「さばきを行なう権利をいただいた」

今見て来たことと同じです。父なる神はご自分にその権利があるように、子なる神イエス・キリストがそれを用いることを許可されているのです。その理由も書かれています。「子は人の子だからです」と。人となられた神だからです。持っていないものを与えたではありません。持っておられる神としてのご性質を行使することを許可されたのです。

5:30にこのように記されています。「わたしは、自分からは何事も行うことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」と。さばきを与えることができるのは神だけです。全世界は必ず、この神の前でさばきを受けます。この後で見ますが、クリスチャンであろうとそうでなかろうと、すべての被造物、人間はさばきを受けるのです。パウロが言うように「…それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。」(ローマ3:19)と例外はありません。

イエスはいのちを与えることができる方であり、さばきを行なう方であると、こうして、この方が真の神であることを証明されました。これができるのは神だけです。そして、主が神であることを明らかにしました。

D. 救いの必要性 28、29節

最後に、主イエスは救いの必要性について話をされています。「なぜ、救われることが必要なのか？」と聞かれたなら、皆さんはどのように答えますか？なぜ、私たちは人々に「救われなさい」と言うのでしょうか？さばきがあるからです。もし、人が死んでそのままなら「救われなさい」と言うことはありません。でも、死んだ後に「さばき」があるからです。だから、私たちは機会があるうちに、救いのチャンスがあるうちに救いを受け入れなさいと人々に語るのです。もちろん、みことばはそのことを私たちに教えてくれます。28-29節「:28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。:29 善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」

1. よみがえりの事実

28、29節はこのように訳されていますが、直訳するとこんな訳です。「:28 墓の中にいる者がみな、子の声を聞くと時が来ます。:29 そして、出て来ます。善を行なった者はいのちのよみがえりへ、しかし、悪を行なった者はさばきのよみがえりへと。」、ですから、28節は必ずよみがえりが起こるという、よみがえりの事実を私たちに教えています。「墓の中にいる者がみな、」と書かれています。すべての者です。ということは、墓の中に留まり続ける者はいないのです。必ず、すべての人が例外なくよみがえって来るということです。

ここに「子の声を聞いて出て来る時が来ます。」とありますが、いろいろな説があります。特に、Iテサロニケ4:16に「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」と書かれています。どんなことか想像しにくいのですが、このように記されています。ヨハネ5:28では「子の声を聞いて」とありますから、何かあるのでしょうか。そして、その後何が起こるのか？

2. 二種類の人

よみがえりが起こるのですが、二種類の人がここに記されていることに皆さん気付かれるでしょう？「善を行なった者」と「悪を行なった者」です。人間はこの二種類しかないということです。すべての人はどちらかに属します。あなたはどちらかです。

・善を行なった者 :

これまでずっと良いことを継続して来た人？そういう人を指しているのでしょうか？そうではありません。ここで言われているのは「主イエス・キリストが語られた真理を信じた人」のことです。別の言い方をすると、「イエスの福音を信じた者たち」です。なぜなら、そのことを神が望んでいるからで

す。神が何を私たちに望んでおられるのか？神を心から愛することです。愛するとは「神の命令に従っていくこと」です。主はあなたの罪を赦すために救い主を送ってくださった。そのすばらしい救い主を信じ受け入れて、その方を心から愛することを神が望んでおられることは明白です。

そういう選択をしてそのように生きている人を神は喜んでくださる。なぜなら、その人は神が喜ばれることを選択しているからです。主のみこころに従って生きているからです。そして、なぜ、ここに「善を行なった者は」と書かれているのかというと、そのように信仰によってイエス・キリストを信じた人々には必ず善行が伴うからです。善行によって神の救いをいただくことは可能ですか？その可能性は0です。なぜなら、私たちが行なう善行はまだ不完全だからです。私たちは自分を納得させるかもしれません。これだけいいことをしている…と。でも、神はそれは不完全だと言われます。だから、私たちが考えるどんな善行も神の基準には達していないのです。人間は自分で自分を救うことはできません。備えられた救い主を信じる信仰によって救われるのです。でも、その信仰をもってイエス・キリストを信じた人は生き方が変わります。新しく生まれ変わります。これまで憎んでいたものを愛するように、これまで愛していたものを憎むようになります。罪を愛していた者が罪を憎む者になり、神を憎んでいた人が神を愛する人へと変わります。神に喜ばれるように生きていく、救いに与った皆さんはそのことを経験されているはずです。

私たちの生き方は神によって変えられたのです。エペソ2：10でパウロはこのように言っています。

「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。」、私たちは神によって造られたのです。神はあなたを新しく造ってくださった。どのような人に神はあなたを造り変えてくださったのか？それは「良い行いをするために」です。それが目的です。あなたが主が喜んでくださることを選択してそのように生きていくために、神の栄光が現われるように、神のみこころに従って生きていくために、神はあなたを造り変えてくださった。みことばは続けてこう言います。「神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」と。ですから、神がくださる救いは私たちを生まれ変わらせ、私たちが良いことを行なう人へと生まれ変わらせてくださる、これが救いです。人間の良い行ないは人を救いへと導きません。しかし、神がくださる救いは救われたあなたを良い行ないへと導いていきます。ですから、この「良い行ない」は救われた人の特徴です。

そのことをイエスは言われているのです。「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、」と、なぜなら、その人は救われているからです。永遠のいのちへとよみがえるのです。

・悪を行なった者：

次は「悪を行なった人」ですが、マタイ7章をご覧ください。自分は救われていると思っていた人たちがいました。彼らはなぜ自分は救われていると思っていたのか？「…『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』（マタイ7：22）と、つまり、このような行ないをしたから自分は救われていると思っていたのです。その人たちに対して主イエスは面白いことを言われます。7：23「しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。』と。「知らない」とは「その人のことがだれであるかを知らない」というのではなく、「個人的なつながりが無い」ということです。救われていないということです。そして、こう続きます。「不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」と。この人たちのことをイエスは「不法をなす者ども」と言われました。法に従わない者たち、道から外れている者たちです。生まれながらの人間はみなそうです。神のおきてに従おうとしない、神が歩みなさいと言われる正しい道から外れて生きています。自分の思い通りに生きているのです。神の教えを全く無視して神に逆らう者たちです。だから、「不法をなす者ども」と言われるのです。私たちはみなそのような者でした。神の教え、神の命令に背いている者たち、「わたしから離れて行け。」と、それが彼らの特徴だからです。救われていない人たちの特徴は継続して習慣的に神に逆らい続けているのです。神に背き続けます。

その人たちに対する非常に厳しい警告がされますが、人類にはこの二種類の人たちがいると言うのです。救われたことが良い行ないをもって証明されている人たち、救われていないことが神に逆らい続ける悪の行ないをもって証明されている人たち、この二種類の人たちがいると言うのです。

3. 二種類の結末

そして、最後に彼らの結末について書かれています。

・いのちを受ける：29節「善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、」と。主によって救われた者たちは永遠のいのちへと入るのです。マタイ25：46「こうして、この人たちは永遠の刑罰に入り、正しい人たちは永遠のいのちに入るのです。」、その人は神とともに永遠を過ごすのです。なぜなら、神がその人を救ってくださり、神とともに生きることを赦したからです。それが証拠に、今、あなたのうちには神が内住してくださっています。その神とあなたは永遠をともにするのです。

・さばきを受ける　：　ところが、神を拒み続けこの救いを拒んでいる人たちには「さばき」があるという警告が書かれています。２９節「悪を行った者は、よみがえってさばきを受けるのです。」と。また、マタイ２５：４１に「それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。『のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火に入れ。』とあります。これが彼らの行くところであると言うのです。また、パウロはⅡテサロニケ１：９で「そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」と記しています。

* 大変な苦しみであることは明らか

少なくとも、こうして見たときに「永遠の火、永遠の苦しみ」と言って、そこには大変な苦しみがあることは明らかです。私たちはそのことを聖書の中に見ることができます。たとえば、皆さんがよくご存じの「金持ちとラザロ」の話を思い出してください。ルカの福音書１６章に書かれていますが、二人の人物、金持ちと貧しかったラザロがいます。彼らに共通していたのは二人とも死んだことです。肉体的な死を経験したのです。その後、二人には全く違う世界が待っていました。ラザロは祝福の中にいました。ところが、金持ちは大変な苦しみの中にいたのです。その様子が１６章に記されています。２４節「彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』」、彼には感覚があるのです。苦しくてたまらないと言っています。アブラハムは彼にこう答えます。２５節「アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。』」と。「苦しくてたまりません。」と本人は言ったし、アブラハムも「おまえは苦しみもだえている」と言っています。そこが大変苦しい場所だということが分かります。

死んだ人たちは今どこにいるのか？イエスを知らないで死んだ人たち、この救いを拒みながら死に与った人たちは、この金持ちが行ったところと同じところにいます。そこで皆が集まって楽しんでいるではありません。大変な苦しみの中にいます。知っている人が何人かいるから…などと悠長なことは言えません。苦しくてたまらないのです。その状態が続きますが、それは永遠に続きません。なぜなら、これは地獄ではないからです。これは最後の審判を受けるまで留まっているハデスと言われるところです。最後の「大きな白い御座のさばき」が起こるときに、最後の神の審判の時に、このハデスにいる主イエス・キリストの救いを拒んだすべての者たちは、よみがえって来て神のさばきを受けます。そして、その後が永遠の地獄です。永遠の地獄も大変なところだと知っていますが、それまで最後の審判を待っているところも大変なところですよ。

最後の審判について黙示録にこのように教えられています。２０：１２「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。」、最後のさばきに立って「あの人が私にこういうことをしたから、この人がこんなことをしたから…」というそのようなさばきではありません。あなたが何をしたかに応じてさばかれるのです。神はどういう環境にいたのか、どのようなきっかけでそのようなことに至ったのかをすべて知っておられます。しかし、私たちが考えなければいけないことは、確かに、人の誘惑を受けたかもしれないけれど、最終的に「イエス」と言ったのは自分だということです。だれかのせいにはできない、自分の責任です。

ですから、最後の審判を見たときに、これはイエス・キリストを信じていない人たちのさばきです。クリスチャンのさばきではありません。なぜなら、クリスチャンはそのさばきに会わないからです。罪が解決されたからです。しかし、罪が赦されていない人たちはここに立つのです。そして、彼らは自分が行なった罪を神の前で正しくさばかれます。自分の行ないに応じてさばかれるのです。

結論　：

こうして主イエスはこれから先に何が起こるのかを教えてくださいました。このような永遠のさばきがあるから救われなさい、このようなさばきの日が来るからその前に救われなさいと。先に見た金持ちが炎の中で苦しみながら『父アブラハムさま。私をあわれんでください。』と叫びました。そこに「あわれみ」はありましたか？ありません。主のあわれみを頂くことができるのは、今私たちが生きているこのときだけです。死を経験した後はその人に救いのチャンスはありません。神は忍耐をもって、一人でも多くの罪人がこの救いに与るようにと待ってくださっています。

もし、この中でまだこの救いを受けていない方がおられるなら、そのチャンスを逃し続けていくということ、それを拒み続けていくということは大変大きな罪です。目覚めなければいけません。なぜ、救い主が来てくれたのか？なぜ、救い主があなたのためにいのちを捨ててくださったのか？それは永遠のさばきがあるからです。そして、もし、あなたがイエスの救いを受けていなければ、今、あなたはその

永遠のさばきに向かっているからです。救いをいただくことができる今、この救いをいただくことです。あなたが今主の前にこの救いを求めて出て来られるなら、主はそれを与えてくださいます。もし、自分の救いが定かでないなら、今日が救いの日となることを心から願います。

クリスチャンの皆さん、今日、私たちはイエスが神であることを見て来ました。なぜ、イエスがご自分のいのちを犠牲にする、そのような歩みをしてくださったのか？そのことを見て来ました。もう一度、5：30を見てください。後半部分です。「…わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」と。つまり、このみことばが教えることは、イエス・キリストご自身は父なる神のみこころに従い続けたこと、そのようにして地上における人としての人生を全うなされたということです。神の計画を完全に成し遂げられたのです。私たちが覚えなければいけないことは、私たちの最高の模範であるイエスは父なる神のみこころに完璧に従った。父なる神が喜ばれることを喜んで行ない、父なる神が悲しまれることから100%離れられたということです。私たちもそれに倣って生きることです。

あなたの信仰生活は生ぬるくありませんか？この世と妥協していませんか？何のためにあなたを救ってくださり、何のために主はあなたを生かして下さっているのか、忘れていませんか？私たちはこの地上にあって、この救い主のすばらしさを伝えていくのです。私たちの模範であるイエス・キリストの生き方は100%父なる神のみこころに従うものでした。それしか主の栄光を現わすことができないからです。どうでしょう？あなたは神のみことばに忠実に従っていますか？「あなたはわたしを愛しますか？」と主はペテロに問われました。あなたにも問われています。「わたし以上に愛するものが他にないか？」「あなたの関心はこのわたしか？」「あなたは喜んですべてのものを私のために捨てるか？わたしはあなたのためにすべてのものを捨てた。」「あなたはわたしを愛していることをどのように証明していくのか？」と…。

主はあなたを愛していることを、ご自身のいのちをもって証明して下さった。今度は私たちの番です、皆さん。イエスに倣って主のみこころに従い続けていくことです。主が命じておられることを私たちは主の助けをいただきながら実践していくことです。そのようにして私たちは生きるのです。それが主が私たちに望んでおられる生き方だから、そのときに主が喜んでくださるのです。そのときに、主はあなたを使って栄光を現わしてくださるのです。このすばらしい主の救いを私たちが覚えたときに、それは私たちにチャレンジを与えます。「あなたはわたしを愛しているか？」と。皆さんはどのようにそれを示しておられますか？イエスは父のみこころに従順に従われた。そして、父なる神は喜ばれたのです。その生き方は、当然、私たちにも要求されています。

感謝なことに、神は私たちのことを知っておられます。どれほど弱く罪深いかを知っておられます。私たちに必要なことは、「神さま、私はそのように生きていきます。イエスさまが歩まれたようにその歩みに倣って私も従っていきます。どうぞ、私を助けてください。私には助けが要ります。自分でやって来たときは失敗だらけでした。なぜなら、それは神のやり方ではないからです。神が私に教えてくださる歩みは『主よ、そのように生きていきます。みこころに従っていきます。そして、それを可能にしてください。あなたを信頼します。助けてください。』です。」、そのようにして生きていきましょう、皆さん！主が私たちを用いてくださる、それが私たちが望んでいることです。

あっという間に地上での旅路は終わります。悔いを残したくないです。それなら、主が歩まれたように私たちも忠実に従順に歩み続けることです。今日から、そのように新たな決心をもって歩んでいってください。

《考えましょう》

1. 主イエスが救い主であることの証拠を挙げてください。
2. 聖書が教える「二種類の人」を教えてください。
3. それぞれの結末について教えてください。
4. 人はなぜ、救われることが必要なのでしょう？